

失われたドーナツの穴を求めて

芝垣 亮介、奥田 太郎 編

ドーナツの穴について深く知ったからといって得るものなんてあるだろうか？ そう思いながら本書を手にとってみた。

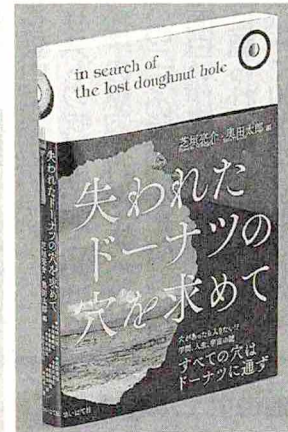
哲学、数学、歴史学、経済学、言語学など多分野の学者たちが、ドーナツの穴を巡ってそれぞれに考察していく。ドーナツの穴を「存在」と捉えるか、「穴が空いている」と捉えるか。構造的にはトラスと呼ばれる形状である。そして、お店で売られていれば、それは商品になる。さらには穴の空いた通貨との共通点もある。ドーナツは多様な側面を持っている。

さて、読み通してドーナツの穴についての知識を深めたところで、やはりこれといった効用は得られていない気がする。だが、この本の価値は別のところにある。本書は学問の見本市。ドーナツの穴を通して、個々の学問の手法や視点の違いが見えてくるのだ。

歴史学者は、過去のイギリスの新聞から「ドーナツ」と「ホール(穴)」の単語を検索し、使用頻度などからドーナツの穴が誕生した時代を推測する。史料を突き合わせ、吟味していくのが歴史学の手法であることがわかる。一方、数学者は穴の開いたドーナツの形状を図形として捉え、そ

さまざまな学問見本市

評・速水 健朗
(ライター)



しばがき・りょうすけ 兵庫
県出身、南山大准教授。専門は
言語学▽おくだ・たろう 東京
都出身、南山大教授。専門は哲
学。

れを数学的に記述しようとする。まったく違う二つの手法を並べてしまう。これが編者側の意図のようだ。

聞き慣れない分野も含まれる。コミュニケーション学。ここでは「座席行動」という概念が披露される。電車でどこに座るか。その決定には、心理的、社会的、文化的要因が関係するという。丸テーブルの会議でもちよつとした位置の違いで、関係性が変化してくる。それがコミュニケーション学におけるドーナツ問題だ。

ドーナツの穴の社会学や政治学の項目は、本書にない。社会科学系は相性が悪い？ などと考えてしまうのはすっかりドーナツ学の手法に毒されているということ。ドーナツの穴という入り口は狭そうだが、奥に広がる世界は案外広かった。

(さいはて社・1944円)

読書